

湯原王、娘子に贈る歌一首

一六一八番

玉に貫き 消たず賜らむ 秋萩の 末わくらばに  
置ける白露

大伴家持、姑坂上郎女の竹田の庄に至り  
て作る歌一首

一六一九番

玉梓の 道は遠けど はしきやし 妹を相見に  
出でてそ我が来し

大伴坂上郎女の和ふる歌一首

一六二〇番

あらたまの 月立つまでに 来まさねば 夢にし  
見つつ 思ひそ我がせし